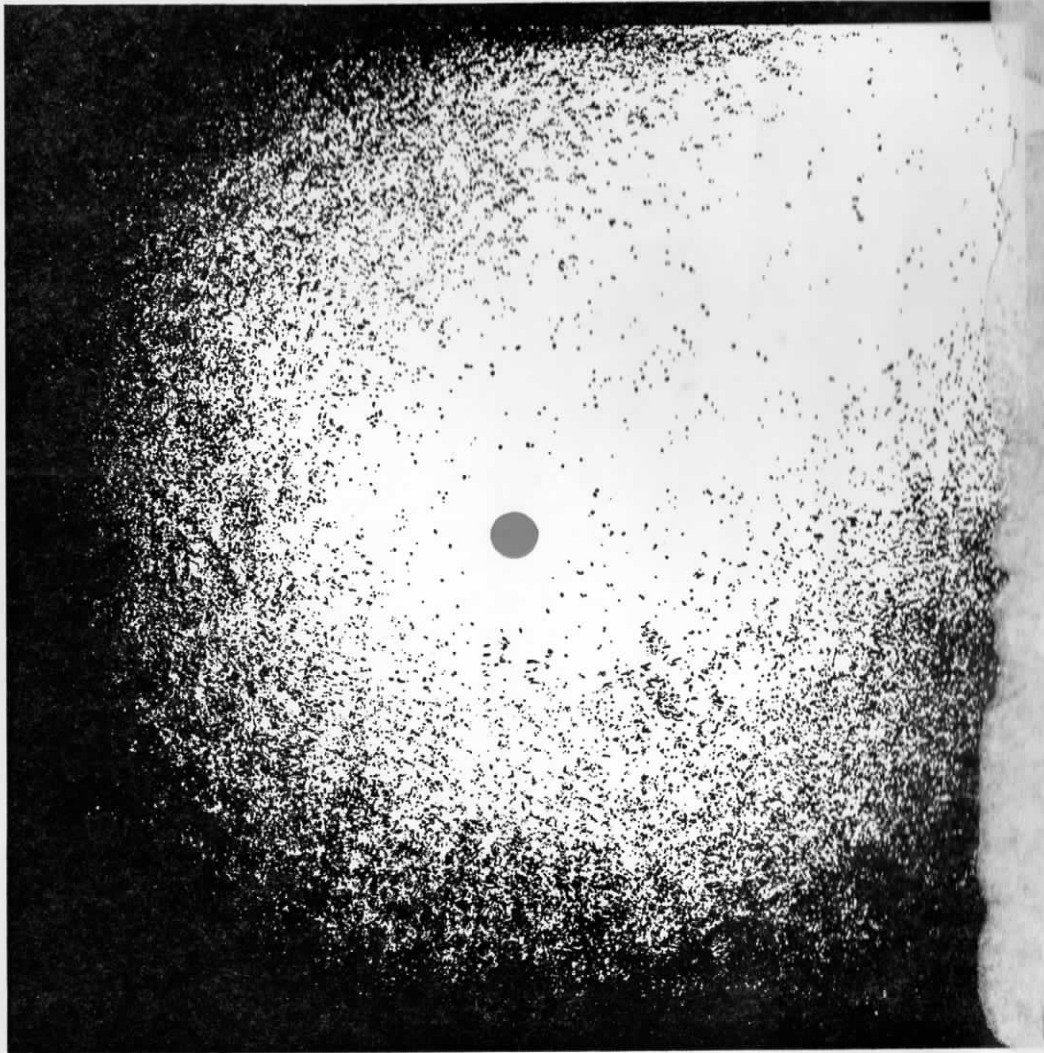


71/11
黒の手帖
12



定価 200円

一九七一年十一月

人間における遊戯と労働 (3)	大沢正道	1
カテキズムへの回帰 (2)	内村剛介	22
一盤散砂	玉川信明	27
アナキズムについてのノート	N.チョムスキー 江川允通訳	29
新たな共同体論への視角	永次健	44
ブルードンと現代 (4)	長谷川進	49
スペイン革命に おけるCNT (11)	J. ペイラツ 今村五月訳	57
編集後記		

表紙 高木 昭

人間における遊戯と労働 (3)

大沢正道

2 未開社会の労働観念

カール・ビュヒャーの『労働とリズム』(二八九六年)については、前回でもふれたが、彼はこの先駆的な著書の第一章「自然民族の労働の仕方」の冒頭で、こう記している。

「労働は一切の経済的現象の出発点を成しているにもかかわらず、この労働の本質が国民経済学者によって根本的に研究されたのは、いままでのところ、はなはだ稀である。」(高山洋吉訳による) このビュヒャーの嘆きは、それから七〇年あまり経過した今日でも、同じように繰り返されている、といわなくてはならない。

労働を主題とした研究は、たしかにおびただしい数にのぼっている。その分野も、哲学、経済学、社会学、人類学等々、きわめて多岐にわたっている。けれども、そのほとんどは、労働の本質ではなくて、労働の現象にかかわっている。労働の起源、労働の道具、技術、労働の形態——分業、労働の組織、労働の効用、効率、労働と労働力、労働のモラル等々についての研究は、それぞれ精細緻密をきわ

めているといっても決して言いすぎではないが、労働の本質を問う研究は、それらに比べてまことに微々たるものである。それは、他の研究のなかで、いわば断片的に、附随して語られることが多い。これはなぜだろうか。ビュヒャーのいうように、労働は「一切の経済的現象の出発点を成している」だけでなく、人間存在そのものの基本的な側面をなしているのに、その本質を根本から問う試みが乏しいのは、なぜだろうか。その理由は、逆説的だが、労働が、まさに人間存在そのものの本質的な側面をなし、ほとんどの人間にとって日常化されてしまっているからであろう。

根本からものごとを問う姿勢は、そのものごとに抵抗し、それとのかかわりをまるごと否定せずにはおれぬパトスがなくては生まれ得ない。あるものごとと自分とのかかわりが肯定的な関係を保っている場合に発せられるそれへの問いは、なぜ、ではなく、いかにして、である。本質論的ではなくて、現象論的である。

もしそうだとすれば、労働についての本質論的な問いかけが微弱で、現象論的な問いかけが旺盛だということは、われわれと労働と

のかかわりが基本のところでは肯定的関係にあるから、ということになる。なるほど労働の苦痛や、労働の搾取についての訴えは山ほどある。しかし、だからといってそれは決して労働の否定には結びつかない。むしろ、それは労働の価値の弁護に結びつく。

労働が苦痛なのは、労働そのもののためではなく、労働を苦痛にしている諸条件（技術のおくれや制度の欠陥など）のためである。それゆえ、これらの諸条件を改良、変革して、真の労働の価値を発現させなくてはならない、というように論理がくりひろげられる。労働の搾取についても同様である。労働の搾取が行なわれるのは、制度上の欠陥のためであり、それが労働の真価の発現を妨げている。搾取なき労働の実現——これこそ人間の追求してやまぬ理想である、というような具合である。

このように、われわれの文明社会を支える価値体系のなかで、労働そのものは、かつて疑われたり、否定されたりしたことはほとんどなかった。文明社会の根幹を成す国家や法に対しては、かなり早い時期から懐疑や否定が提出されていたが、労働そのものに対する懐疑や否定は、ごく少数の場合をのぞいて、めったにみられなかったといつてよい。労働は、それくらいしっかりと、文明社会の価値体系のなかで安定した地位を占めている。そのことが、労働そのものへの根本的な問いかけを容易に発せさせなかったのである。

しかし、労働にこれほど安定した地位を与えているのは、おそらくわれわれの文明社会、とりわけ工業化（いわゆる近代化）の進んだ社会だけであり、他の人間社会には例をみない特殊なケースであることも、ここで述べておく必要がある。

人間社会は、歴史的にも地理的にもさまざま多様であつて、われ

われの文明社会で通用する価値体系は、決してそれ自体普遍的ではない。そのほとんどは相対的なものである。

たとえば、旧約聖書のはじめに出てくる有名な楽園喪失のくだりをみてみよう。

エデンの園において、そこに生えている木の実を「どれでも食べただけ食べて」暮らしていたアダムとイヴは、蛇の誘惑に負けて園の中央にある「善悪を知る木の実」を口にし、ヤハウエ神の怒りを買う。そして罰を受けるのだが、その内容は、「創世記」によると、次のとおりである。

「次に女にむかつて言った。

『おまえの苦しみと渴きをぐんとひどくしよう。おまえは苦しんで子を産むのだ。しかもおまえは夫を渴き求め、彼はおまえを従えるのだ』

最後に男にむかつて言った。

『おまえは妻の言うままに、あれほどわたしが食べてはならぬと言つておいた木（の実）を食べたゆえ、おまえのために土地が呪われる。そこから糧を得るのに一生おまえは苦勞するだろう。生えてくる茨と薊に悩まされながらおまえは野の草をかじり、額に汗してパンを食べ、ついには土に帰るのだ。もともと土から取られた身、おまえは土くれだから、土くれに帰るのだ。』

（中沢治樹訳による）

「創世記」が語るところによれば、女が受けた罰は産みの苦しみであり、男が受けた罰は労働の苦しみとなつてゐる。労働は、いふなれば原罪の報いとみなされ、人間が生涯背負わねばならぬ罰として觀念されている。それは、文明社会における労働の觀念とは明らか

かに質を異にしている。

「創世記」の記述で、どの程度、古代イスラエル人の社会の状況を反映しているかはむずかしい問題がある。だが、木の実を「どれでも食べたいだけ食べて」暮らすエデンの園の生活から、採集狩猟社会を想像するのは、ごく自然である。また、「茨を薊に悩まされながら」土地から「糧を得る」労働が、農耕労働であると考えるも、牽強付会とはいえない。

もしそういうことがいえるとするれば、この有名な説話をとおして、採集狩猟社会での労働は、農耕社会での労働に対比して、ほとんど労働として意識されず、いふなれば理想化されていた、と考えることが出来る。そして、現在の通念によれば一歩進んだ段階とされている農耕社会での労働は、神の加えた罰として、否定的にとらえられている、とみることが出来る。

神の罰としての労働という觀念は、きわめて深刻な、人間存在の本質に迫るものをもっている。ここでは、労働を苦痛にしている諸条件は副次的なものである。いくらこれらの諸条件を改良、変革しても、労働の苦しみから人間は救われぬ。救いはただ、神に赦しを乞ふこと——すなわち信仰の道あるのみ、ということになる。

もっとも、このような觀念が古代農耕社会で共通のものであったかといえ、決してそのようなことはない。むしろ、それは古代イスラエル人に独特の觀念と考えるべきであらう。

前八世紀頃の作とされている古代ギリシャの詩人ヘシオドスの「仕事と日々」は、「創世記」とおなじように、人類の歴史を金の種族から鉄の種族への転落の歴史とみながら、労働については、「創世記」とまるで逆の觀念を示している。

「悪はややすと山ほども手にはいる。

そこへ行く道はなめらかで、そのすまいはごく近くだ。

ところが、徳のまえには不死なる神々が汗をおかれた。

徳にいたる山路は遠くて急で、はじめのほどは

でこぼこもひどい。いったん頂上に着いてしまえば、

あとはもうつらいといつても知れたものだ。」

（真方敬道訳による）

ここでいう汗とは、いうまでもなく労働をさしている。ヘシオドスによれば、「昼は彼らに労働と悲痛の終わるときがないし、夜はまた、神々のよこすつらい心配ごとで、彼らは疲れはてるであろう」というみじめな世界に、人間は暮らしている。

だが、そのような苦しい世界にも「ゼウスの正義」は貫かれている。その正義を、最も原初的に、つまり根本的に人間が実践すること、それが労働である。なぜなら、自分自身はしあわせな「神は暮らしのあてを人の子らに見せまいと、手もとに隠しておかれ」たのだから、人々は労働をとおして、しあわせな暮らしのあてをさがしださなくてはならぬのである。

ここでは、労働は神の加えた罰ではなく、苦痛ではあるけれども、それを耐え抜くことで正義が実現される、神の与えた試練として觀念されている。したがってそれは労働を究局的には肯定的にとらえているといえよう。

神話や伝説、叙事詩、民話などを手がかりにして、古代農耕社会における労働の觀念を解明していく作業は、おそらく多くの実りある示唆を今日のわれわれに与えるであらう。しかし、いま、そのような作業を進める素養も力量もはくにはない。神話や伝説、叙事

詩、民話などを正しく解読するには一定の学問的修練が必要であり、そのような学問的修練を積んだ研究者でなければ、この作業を十全に完遂することはむずかしいからである。ぼくとしては、ひたすらこのような専門家による研究の、一日も早くなされんことを、期待に胸をはずませながら待つばかりである。

そこで古代社会を離れて、現代の未開社会に論点を移すことにしよう。

「創世記」ではエデンの園と目され、「仕事と日々」でも金の種族の時代と追想された採集狩猟段階の社会は、今日、地球の片隅にはそれほど散在している。農耕段階やさらに進んだ工業段階の社会の圧力に敗れて地球の片隅に追いやられた今日の採集狩猟民、たとえばアフリカのブッシュマン、グリーンランドのエスキモー、南アメリカのナンピクワラ等々の社会生活が、人類の大半がかつて経験してきた採集狩猟社会とまったく同一であるとは決していえないだろう。いわゆる古代採集狩猟社会は、いまからすくなくとも二万年以上まえに存在していたとされており、二万年という気の遠くなるほどの歳月が、なんの変化もそこに住む人間に及ばなかったとは、信じがたいからである。たとえ採集狩猟社会のように、時間の觀念のとほしい社会にあつてもである。

それゆえ、現存する採集狩猟民の生態から、古代採集狩猟社会を推測し、さらに人類の進化の歴史の手がかりをつかもうとする試みは、それ以上の手がかりが実際にはないとはいえ、いくつもの留保をつける必要があるだろう。それよりもむしろ、現代の人類の生活様式の一つとしてこれを受けとめることの方が、より重要である。現代人の可能性の一つとして、われわれとまったく異質な価値体系

の下で生活する彼らの生態をみていきたいものである。はたしてブッシュマンやエスキモーやナンピクワラの社会は、文明社会に住むわれわれからみてエデンの園であろうか、金の種族といえるであろうか。そのことを、彼らの労働觀念を明らかにしていくことをつうじてさぐってみたい。

もつとも、ここでも、古代農耕社会の労働觀念をさぐった時とおなじような障害がある。

「野外調査の人類学者」の先駆であるB・K・マリノフスキーの高弟の一人R・ファースは、「未開人の経済」(吉田植吾訳『人類学入門』弘文堂所収)という論文のなかで、ビュヒャーを批判している。ファースの批判の論点は二つある。

一つは、彼もまた肘掛け椅子に座って、「旅行者その他の人たちがしるした記録から、原始的生活について多くの事実を蒐集したが、「自分自身で未開人の生活を直接研究したことはなかった」点である。このために、ビュヒャーの研究は事実の壁にぶつかって屈折することが少なく、觀念の歩みに事実の断片をちりばめる傾向に陥った。これは十九世紀の進化論的人類学に共通の弱点でもある。いま一つは、「こういう資料を解釈するために用いた考え方の枠組」が、「十九世紀の西欧に月なみのものであった」ことだ。ファースはその例として、ビュヒャーは、ヨーロッパ人の経済觀念を尺度にして、未開民族の経済觀念を批判し、その独自性を評価していない、と論じている。

ファースが批判しているビュヒャーの大著については、読んでいないのでなんともいえぬが、『労働とリズム』に関するかぎり、ビュヒャーは、むしろ、未開民族の経済行動、さらには経済觀念の独

自性を、やや誇張にすぎるほど認めているようにおもわれる。しかし、それは当面の問題ではない。

問題は、収集された「資料を解釈するために用いた考え方の枠組」にある。いや、たんに資料を解釈するためだけではない、とくに「野外調査の人類学者」の場合には、調査するにあつた「考え方」が問題となる。それが「月なみ」ものであれば、三年、五年の野外調査といえども、月なみな結末に終らざるをえないかもしれない。

その点でいえば、「野外調査の人類学者」の業績についても、労働の本質を問うという視点でつらぬかれたものは、ぼくのあつた文献のかぎりではついぞお目にかかれなかった。ビュヒャーの提起した問題は、どうやら現代の人類学者たちにとっては、ビュヒャーは古いという偏見によって抹殺されてしまったものらしい。

それゆえ、これから述べるブッシュマン、エスキモー、ナンピクワラにみられる労働觀念の究明は、これらの諸族に関するすぐれた民族誌を資料にして、間接的にさぐる以上にでない。ここでもまた、ぼくは人類学者による未開民族の労働觀念の解明に期待せざるをえないのである。

a ブッシュマン

中央アフリカのカラハリ砂漠に住む代表的な採集狩猟民ブッシュマンについては、田中二郎の周到な報告書『ブッシュマン』(一九七一年 思索社)がある。この本が今年三月に刊行されたことは、まことに幸せであった。なぜならそれは第一に、ブッシュマンの生態、とりわけ食生活と集団構造についてのもつとも新しい報告であり、

第二に、まことにむだなく、簡明に問題が提起され、調査の結果がまとめられており(人類学者の調査報告は、のちに述べるレヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』にせよ、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』にせよ、見聞記、旅行記スタイルのものが多く、それはそれで文学的香気が漂い、読みごたえはあるのだが、当の住民の生態に関する個々の情報を的確簡潔につかみにくい傾向をもつている)、第三に、日本語で書かれており、外国文献とちがって訳説という危かな手間を強いられずにすむからである。

さて、以下、田中の著書によりつつ、ブッシュマンの労働觀念を、

可能なかぎりさぐっていくことにしよう。ブッシュマンの社会の単位は核家族である。数家族が集って、数十人単位のキャンプを作るのが普通だが、このキャンプの期間は早い時には一週間、長くても数週間、またべつのキャンプ地に移動する。この移動は、採集狩猟民の特色であり、それがこの社会の質を決定しているようにおもわれる。彼らが移動するのは、ほぼ百パーセント、植物性食物を採集しなくてはならぬ必要のためである。一カ所のキャンプ地がブッシュマンの生活を支える期間は、キャンプする人数や、キャンプ地の植物の種類、繁茂の状況、季節などによつてもちろん左右されるが、平均して一週間から数週間とされている。つまり、彼らはキャンプ地周辺の食物を消費し尽くすと、また新しく実つた食物を求めて、べつのキャンプ地へと移っていくのである。

田中の観察したところによれば、もつとも頻りに移動を行なった家族は、七カ月に十一個所のキャンプを作り、約二五〇キロメートルの距離を移動したという。七カ月に十一カ所といえば、だいた

十五日ごとに移動していったことになる。

また、移動する場合、あるキャンプ地にキャンプした数家族からなるグループがそっくりそのままべつのキャンプ地へと移るとはかぎらない。むしろ移動のことに、グループの構成家族の数は、ふえたりへたりするのがふつうである。このような離合集散の繰り返しも、ブッシュマンの社会の特徴で、その理由としてはキャンプ地で得られる食物の量（食物量の多いキャンプ地では、当然、大人数を養いうるが、少ない場合にはいくつかに分散しなくてはならない）、あらたに結ばれた婚姻関係、グループ内の緊張関係の緩和（ブッシュマンは非常に平和的な民族で、食物の分配や異性の取り合いからトラブルが生じても、めつたに暴力沙汰は起こらない。彼らは自分からそのグループを去って、べつのキャンプ地のグループに合流する。「ブッシュマンにとって、グループの分裂とは、ある人々が一つのグループを見捨てて去ったり、ある人々が一つのグループから追い出されたりするものではなくて、ただたんに、ある人々がそのグループとは異なった場所に生活するようになる」ということを意味するにすぎない」（傍点筆者）のだ）などがあげられている。

こうした頻繁な移動や離合集散は、農耕社会や工業社会に特徴的な土着や定住と、まことに対照的である。

二、三週間ごとに、好きなキャンプ地を求めて自由に移動し、あるグループに加わっても、べつにそのグループに生涯帰属するのではなく、自然の必要と自分の好みに応じて、あちこちとグループを渡り歩くブッシュマンの生活形態は、強いていえば、かつての渡り職人や旅商人、旅芸人などの生活形態と対比することができる。それは決して気まぐれやでたらめではなく、一定の「規則性」に則っ

て営まれているのだが、その流動的で開放的な社会構成は、もつとも自然な人間の姿ということができるとも思えない。

あたらしいキャンプ地に到着したブッシュマンは、まず小屋をつくる仕事にかかる。この仕事は、小屋の枠組にする木を伐採し、持ち帰ってくる以外は、大体女によって行なわれる。小屋は、ドーム型の枠組の上に背丈の高い草を葺くという、直径約二メートル、高さ約二メートルのお粗末な代物で、この小屋を建てるのに要する労働時間は正味二、三時間だという。しかし、

「雨が降りそうな気配がないかぎり、女たちがこれを一度に作ってしまうことはない。毎日の採集旅行を終わってからのひとときに、彼女たちは、友人たちとのんびりおしゃべりを楽しみながら行なう。しかも、一度に少しづつ。したがって、できあがるのは、たいがいキャンプをはじめから、四、五日経ってからである。」（傍点筆者）

社会の単位は核家族だけれども、小屋作りやのちに述べる食物の採集などは、みなグループの共同で行なわれる。この共同労働は、ブッシュマンの労働観念にとって基本の一つといつてよいだろうが、それとやらんでいま一つ特徴的なことは、一気にやれば二、三時間で仕上がる仕事を、すこしづつ四、五日かけて仕上げるという労働のやり方である。

なぜブッシュマンの女たちは、一度で小屋を作らず、何度かにわけて作ろうとするのだろうか。それについて、田中の著書はなにも語っていないが、ここですこし推理を逞しくしてみよう。

考えられることの一つは、ブッシュマンにはほとんど時間の観念がない、という点である。時間の観念がうすいから、いついつまで

に小屋を仕上げなくてはならない、という観念は浮かんでこないのだろう。小屋といつても、地面の上を草でかこった程度のもので、

「ほんの日覆いか風よけの意味しかもって」いない、したがって、それほど必要度を、彼らは小屋に感じないのかもしれない。小屋がなければ、彼らは露天でごろ寝することになるのだが、露天でごろ寝しても、小屋のなかでごろ寝しても、雨でも降らぬかぎり、大差ないのだろう。雨が降りそうな気配のある時には精出して一度でも作る、という事実は、この推定を裏づけるものではないだろうか。

もつとも、さっぱり降雨の気配のない晴天続きであっても、彼女たちは四、五日をかけて小屋を作る。だから、必要に迫られる、ということだけが、彼女たちを労働に駆り立てる基準とはいえない。必要に迫られる、ということが、ブッシュマンの労働にとっての最大の刺激であることは、あとで述べるように、食物の採集や狩猟の場合にも明らかなのだが、それだけでは説明しきれぬなにかが働いているようにおもわれる。

そのなにかは、「のんびりおしゃべりを楽しみながら行なう」というくだりのなかに示されている。田中によれば、「ブッシュマンはおしゃべりが好きで、ほんのきさいなことをつかまえては冗談の種にし、朗らかにしゃべり合ってはゲラゲラと笑いこころげることのできる、大変ユーモアのセンスに富んだ人々である。」おしゃべりは、彼らにとって「大きな娯楽の一つでもある。」

つまり、ブッシュマンの女たちは、ここで労働と娯楽とを結びつけている、とみることができるといえる。材木をならべて枠組をこしらえ、丈の高い草を集めて、屋根に葺くという労働それ自体は単純で、単

調なものである。この単純で単調な労働を、彼女たちはおしゃべりをしながらやることで、楽しいものにしていく。

それは、彼女たちが労働の効率よりも、労働の楽しみを大事にしていることの現われ、とみることができるといえる。効率の点からいえば、黙々として労働に集中した方が、はるかによいことは分かりきっている。「仕事中は私語を禁ず」とは、近代の職場の「モラル」である。

しかし、ブッシュマンの労働観念では、効率は皆無ではないだろうが、おそらく最下位あたりにおかれている。最上位におかれているのは、おそらく必要で、そのつぎが楽しみ、共同という順序ではないだろうか。

労働は楽しく、おもしろくやるものだ、という観念が社会通念となつてい社会では、逆に、楽しくなくなった労働、おもしろくなつた労働は、打切られなくてはならぬものとなる。緊急の必要に迫られぬかぎり、それは中止され、延期されなくてはならない、ということになる。

「どんな楽しみでも、二時間以上ぶつづけにつづくと、あきあきし、弊害が生まれ、われわれの享受力がなまり、喜びがうばわれる。」（『家庭・農業組合概論』とはシャルル・フリーエのことだが、ブッシュマンの女たちは、たしかに生活の本能をもって、小屋作りの仕事を、一度に少しづつしかやらぬことにしたのであろう。）

ここで念のために述べておくが、彼女らが一度に少しづつしか仕事をやらぬのは、ひたすら、労働の楽しみが短時間しかつづかぬためであつて、いやいや働かされたために仕事の質が低下するのを避けようというような配慮からではなさそうである。彼女らにとって、一番

関心があるのは、いまの働く楽しみであって、なにが、どう作られるか、というような事柄ではないからだ。

小屋作りは、キャンプ地を移動するたびに行なわれる労働だが、食物の採集と狩猟は、一年三百六十五日、ほとんど休みなく行なわれる労働である。ブッシュマンは、そのほか、男の場合は狩猟に使う道具や皮製品の製作と修理、女の場合は食事の用意や育児などの労働に従事するが、キャンプでのこれらの雑仕事に費やされる時間は、平均すれば一日二時間足らずであり、なんといっても採集狩猟が彼らの主要な労働なのである。

「ブッシュマンの一日の生活は、日の出前後の起床とともに始まる。キャンプの人々は、別段、揃って起きたすわけではなく、目を覚ましたものからめいめい勝手に起きだす。それぞれの家族ごと、小屋の中や小屋のすぐ前に作った焚火で前日の残りの肉や採集物を料理して食べ、やがて、男は狩猟に、女は植物採集にかける。」

と田中は書いています。「目を覚ましたものからめいめい勝手に起きだす」というのも、まことに自然に生きるブッシュマンらしい。

ところで、ブッシュマンの食生活の基礎は、植物性食物におかれている。というのは、植物性食物は、「植物の存在が予知できるうちに、それを集めることは誰にでもできる容易なもの」だからである。動物の狩猟は、高度の熟練と強度の労働を必要とし、しかもいつでも獲物にありつけるとはかぎらない。「普通、大型カモシカの狩猟には、三日から四日を要する」といわれている。大型カモシカを追っている間、なにも食べずに過すことはできない。だから植物性食物を毎日の食事のベースとして、ブッシュマンにとって最上の

御馳走である動物の肉は、いわば副食の位置におく、という戦略配置がとられている。

主食である植物性食物の採集は、主として女の仕事とされている。彼女たちは、たいてい何人かのグループを作って採集に行くが、その行動範囲は、もともと植物性食物の豊富なところにキャンプしたわけだから、さして広くない。採集に要する労働時間は、採集する植物や、その多寡によってまちまちだが、いずれにしても、一日「約一時間から数時間」とされている。

採集労働には *picking* (摘むこと) と *digging* (掘ること) の二つのやり方がある。*picking* の方は、植物の葉や茎や果実などをただ摘みとるだけの労働だが、*digging* では、主として掘棒が使われ、時には数十センチメートルもふかく掘り下げて、植物の根茎を掘り起こすことがある。根茎類は、乾季にはとりわけ、ブッシュマンにとって重要な水源であり、食物源であるとされている。

この掘棒は、直径二センチメートルぐらい、長さ九〇〜一一〇センチメートルぐらいの、先を斜めに切った簡単な棒だが、この棒のおかげで、ブッシュマンは乾季でも日干しにならず、カラハリ砂漠で生きつづけることができるのである。

採集労働には、もう一つ重要な仕事がある。それは、狩猟についてもいえるのだが、収獲物をキャンプ地まで運ぶ *carrying* (運ぶこと) がそれである。*carrying* は、車のような運搬手段をもたぬブッシュマンにとってかなりの重労働である。彼らのもつ運搬手段は、狩猟具袋、皮フロシキ (おもに女が採集物を運ぶのに用いる)、運搬用ネット (男が肉を運ぶ時に用いる)、小物入れ (なめし皮の小袋で、小さな果実の採集運搬に用いる) の四種類しかない。

ほとんど雨の降らない、炎天下のカラハリ砂漠で、植物の茎や果実などを摘みとるのは、たとえおしゃべりしながらの数時間でも、ちょっとした労働であろう。まして掘棒を使って、砂土を数十センチメートルも掘り下げたり、たとえば二〇キログラムもある豆の束をサヤごとキャンプ地まで運搬するのは、女にとってかなりの労働といわなくてはなるまい。

しかし、小屋作りの場合とちがって、彼女たちは、大型カモシカやキリンのような獲物が首尾よく仕止められ、大量の肉が手に入った場合をのぞいて、それを一日も休むわけにいかない。彼女たちが労働が辛いからといって休めば、家族全員が餓えに直面するからである。必要がすべてに優先するゆえんである。

もつとも、そうだからといって、小屋作りの際にみられた「一度に少しづつ」という労働観念が忘れられているわけではない。ブッシュマンの好物であるメロンなどが豊富な時期には、彼女たちは一時間足らずしか採集に費やさない。たとえば、三、四時間をメロンの採集にあてて時を過ごせば、二、三日は採集を休むことも可能はずだが、彼女たちは決してそういうことをしない。

一つには、食物の鮮度がおちるためであろう。もぎたてのメロンと、一日か二日、日をおいたメロンとはたぶん味がちがうはずである。他の未開民族もそうらしいが、ブッシュマンも、食物の味に關してはなかなかうるさ型なのである。田中は、それについて、次のように書いている。

「……たいていの季節には、右にあげた植物性食物のうち、数十種かは食べられる状態にあるのであるが、実際には、彼らはおもつとも好ましい食物を求めて選り好みし、食卓にもたらされるの

は、いつの季節にもわずかな数種程度にすぎない。彼らが大変好むとする植物がふんだんに得られる時期には、たった一種類か二種類の植物だけが集められてくる日が続くこともある。」

だが、それよりも、必要ぎりぎりしか労働しない、という観念が、採集労働の場合にも貫徹されている、とみるべきであろう。そしてそれがまた、労働をできるだけ楽しくするために、必要ぎりぎりの労働しかしない、という労働観念は、文明社会のそれとまことに対照的だといわなくてはならない。このことは、ブッシュマンの、いま一つの代表的な労働である狩猟労働にもはっきりと現われている。

狩猟労働は、男の仕事とされておき、男たちは、ほとんど毎日、動物をさがしにキャンプ地を出発する。狩猟の場合には、採集の場合とちがって最初からグループを作ることは少く、たいてい、一人づつか二人一組で、別々の方角に向かう。その方が、動物に出会う確率が大いからであろう。だが、一度、獲物を射とめると、すぐに追跡隊のグループが作られ、痛手を受けた動物のあとを追うことになる。また、仕止めた動物の運搬も、共同で行なわれる。

狩猟のハイライトは、なんとといっても弓矢を使つての大動物 (大型カモシカ、キリン、ダチョウなど) の狩である。『カラハリの失われた世界』の著者ヴァン・デル・ポストは、ブッシュマンは天才

的な狩人だと述べているが、大型カモシカなどの肉は、キャンプ地全員の数日の食糧になるので、大型カモシカなどを射止めた狩人は、キャンプの仲間たちばかりか、近在のブッシュマンからも「価値ある男」とみなされ、尊敬される。彼らはそこで、ますます腕をみがくのである。

もつとも、カラハリ砂漠には大動物はそう多くない。一日二十キロメートル、日蔭のほとんどない草地を歩きまわり、それでも手ぶらでキャンプ地にもどらなくてはならぬ日が何日も、時には何週間もつづくという。それは、まことに割のわるい労働だが、それでも彼らが狩猟に精をだすのは、「一時に大量の肉を手に入れることができる」という、その魅力に支えられてのことにはかならない」と田中は書いている。

経済的動機はたしかにそうであろうが、彼らが狩猟に執念をもやすのは、それだけではなく、狩人としての威信をたかめようとする名譽欲や、狩猟そのものに内在しているゲームとしての楽しみもまた、彼らを狩猟に駆り立てる動機といえよう。

ブッシュマンの男たちは、彼らが獲ろうとする動物の習性を変えてよく知っており、その知識を狩猟の場合に百パーセント活用する。たとえば、ホロホロチョウは、巢の外にタマゴがあると、それを内側にこらすが習性がある。そのことを知っている彼らは、ホロホロチョウの巢を見つけると、タマゴを一個、巢のふちにおき、もどってきたホロホロチョウの雌がタマゴを巢の内側にいれようとしたらかかるようにワナを作る。そして、首尾よく、雌とタマゴとを頂載する。

こういうワナや鉤竿を使用する狩猟で、彼らが捕獲するのは、小

的に食べるのを止める。ところが、人間は、このような生理の自動性を失っている。ショシャルが指摘しているように、「人間は飢えていないのに食べ、渴きなしに飲むことに慣れていて、料理の主要な目的はまさしく満腹によって食事を止めるのを妨げることにある『人間の生物学』という具合である」と述べたが、ブッシュマンはまさしく、生理の自動性を失っていない人間といえるだろう。ブッシュマンは「けつして必要以上に食物を集めることはしない」と田中は書いているが、その理由は、基本的にはブッシュマンが、そのような、いまだには不幸にも珍しくなった、「生理の自動性——単純な自家調節作用」を失っていない人間だからであろう。そして、文明社会のそれとは対照的な彼らの労働観念も、そこから説明できる。

田中の精密な計算によれば、ブッシュマンの労働時間は、「一人一日について平均六時間乃至七時間を越えることはない」といっている。それは、彼のいうとおり、カラハリ砂漠という、この地球上でもっとも恵まれない生活条件の下での労働量としては、想像以上に少ないものといえてよい。しかも、その質は、文明社会の労働と異なり、効率よりも楽しさを重視する観念でつらぬかれていたのである。

逆にいうならば、労働がこのようなかたちで営まれてきたからこそ、生理の自動性が失われずすんだのかも知れない。

予想外にブッシュマンの説明が長くなったが、おなじ採集狩猟民族でも、ブッシュマンとまったく異なった自然環境に住み、採集よりは狩猟を主として生活しているエスキモーと、雨季には農耕生活を営み、乾季には採集狩猟生活を営むナンピクワラの労働観念を、ブッシュマンのそれと対比しながら、手短かにみていこう。

型カモシカ、キツネ、ウサギ、ホロホロチョウなどの小動物である。ワナや鉤竿を使う狩猟は、それほど遠くまであてもなく歩く必要はなく、獲物を得る確率は高いし、かつ容易だが、その代わり、小動物なので、キャンプ地の全員の食欲を数日にわたって満たすような大盤振舞いはとてもぞめず、せいぜい数家族で食べられる程度である。

何週間に一回、あるいは何か月に一回、大動物が仕止められた時、ブッシュマンは、キャンプの中の木の枝にその肉をぶらさげて、肉がなくなってしまうまで、何度でも食事をする。そういう時は、彼らは「採集にも狩猟にも行こうとしない。一日中、キャンプで寝ころがっていたり、お喋りをしては笑いころげたり、歌を歌ってダンスをしたりしながら、おながか空きかけると肉を料理して食べる」のである。それは、ブッシュマンにとってわが生涯の最良の時である。

働くときは、一度に少しづつを原則としている彼らが、食べるときは、あるだけ一度にを原則としているのは、まことに対照的である。すでにみてきたように、ブッシュマンには貯える、という観念がほとんどない。貯えるという観念がうすいから、貯蔵の技術が発達しなかったのか、あるいはその逆に、貯蔵の技術が発達する自然環境でなかったから、貯えるという観念が育たなかったのか、おそらく相互に作用し合った結果であろうが、いずれにしても、それは彼らの社会生活の特徴といえる。そしてこのことは、彼らが、文明社会の人間よりは、むしろ動物に近い心性の持主であることを示している。

ぼくは前節「労働の四つの指標」で、ショシャルの指摘を敷衍して、「……動物は、空腹になれば食べはじめ、満腹になると自動

b エスキモー

エスキモーは、アジア大陸北部、アラスカ、カナダ北部からグリーンランドにかけて住んでいるが、ここでは、J・ミルスキーの調査したグリーンランド東部のアンマサリク・エスキモーの実態に即してみていこう。(J. Minsky "The Eskimo of Greenland" in *Cooperation & Competition among Primitive Peoples*, edited by M. Mead, 1937, revised edition 1961.)

アンマサリク・エスキモーの住むグリーンランドは、ブッシュマンのカラハリ砂漠とまったく対照的に、全島の約八五パーセントは氷河と万年雪におおわれ、海岸部には巨大なフィヨルドやツンドラ地帯がみられるという、極北の地である。だが同時に、不毛の極致であり、もつとも人間の住みにくい土地、という点では、奇妙に一致しているともいえるだろう。

ミルスキーは、「アンマサリクの経済は、海と海流と氷に全面的に依存している」と書いている。この点でも、ブッシュマンとは対照的だが、たしかに陸は木一本生えぬ万年雪のツンドラであり、きつねや鳥類や食用の草や草の実が少し獲れるほか、なにも生活に必要な物資は存在しない。もつとも、氷晶石、黒鉛などの鉱物資源はきわめて豊富だというが、それらは彼らの日常生活にとって、なんの役にも立たぬものでしかない。

もし海がなかったら、アンマサリクはどうして生存することができなかつただろう。北氷洋の西風が、木のない彼らの土地にシベリアから流木を運んでくる。この流木を使って、彼らは冬の長屋を建てたり、ボートの骨組を作ったりする。また、波に洗われて自然に

できた軽石は、彼らの衣服や長屋やボートなどに欠くことのできぬ皮をなめすのにかっこうの道具である。しかし、彼らが海から受ける最大の恩恵は、なんといっても、海に住む動物たち、あざらし、せいうち、しろくま、いっかく、くじら等々であろう。

とりわけ、あざらしは、彼らにとつてなくてはならぬものとなっている。あざらしの肉は、いうまでもなく彼らの主食物だが、あぶらは燃料に、皮は衣服や袋物、ボートの材料に、腱は糸に、腸はボートの防水に、歯や骨は武器、道具類にとつたあんばいで、百パーセント活用されるからである。

アンマサリクの社会の単位は、ブッシュマンとおなじく核家族だが、彼らが数家族集つてセツルメント（ブッシュマンのキャンプに相当する、ただし移動はしない）を作るのは、九月末、海が完全に氷結しはじめる時期から四月末の解氷がはじまる時期までである。

彼らは、この地方にある三つの巨大なフィヨルドの周辺に集まり、その岸に沿つて点々とセツルメントを作る。セツルメントは、それぞれ一つの長屋からなり、十人から六十人あまりの数家族を擁している。この数家族の結びつきは、一冬中は続くが、それ以上は続かない。彼らの結びつきはきわめて自由で、多くの場合、血縁続きの家族が一つのセツルメントを作るが、ただの友だち同士のこともある。

「……冬季のセツルメントは、自由な主権国家の連合と考えてもよいかもしれない。その一員である人々の参加、不参加は思いのままだし、いつ去つていってもかまわない。また、連合内にいる間、彼らはその個人の権利を最大限保持している。」

と、ミスルキーは書いているが、ブッシュマンにもみられたこの離れ

だが、貯えについてはいくらか異なる。それは、すでに述べたように、冬のきびしい自然環境が狩猟を困難にするからで、魚を干物にして貯えるほか、あざらしなどの肉や油もできるだけ貯えようとしている。それについて、ミスルキーはこう述べている。

「……沿海にはこれらの動物が沢山いるが、大量の食物を集めることは、彼らにはできない。よしんば集めることができたとしても、肉や油を年々貯蔵するような方法が、彼らにはない。彼らが、腐らずに食物を貯えておけるのは、せいぜい数週間か数カ月である。だから、猟がうまくいった時には、彼らは腹一杯食べる。悪天候が続いて猟ができなくても、数週間は食べていけるくらいにの食料と油の貯えはある。しかし、悪条件がさらに長引くと、彼らは飢餓に直面する。」

アンマサリクは、ブッシュマンよりもさらにきびしい自然環境にさらされているようにみられる。彼らに課せられる自然の必要は、ブッシュマンよりもいっそう苛酷であるようだ。しかし、それに対する彼らの対応の仕方は、原則的には、ブッシュマンとおなじである。彼らが貯えるのは、冬の必要に迫られてであり、この条件が満たされれば、彼らもブッシュマンのように、働かずに腹一杯、獲物を食べつくすのである。

合集散の自由は、とうてい「自由な主権国家」にはみられぬものだろう。

アンマサリクが冬季にセツルメントをこしらえるのは、冬季は狩猟が困難な時期であり、しばしば飢饉に見舞われるため、とくに共同する必要に迫られるからであり、この必要だけが彼らを結びつける動機なのである。

だから春になり、氷が解けて、狩猟のシーズンにはいると、自然にこのセツルメントも解体される。彼らは家族ごとにテント生活をしながら、獲物を追つて自由に移動するのである。

アンマサリクでも、狩猟は男の仕事とされている。もともと、女が狩猟にたずさわつてはいけないと禁止されているわけではない。男はまた、狩猟に必要な道具や日用品、装飾品を作り、家族の移住地をきめるなど、社会生活の主導権をにぎっている。

一方、アンマサリクの女のおもな仕事は、男が獲つてきたあざらしなどの海獣の皮をはぎ、なめしたり、肉を料理したりすることである。あざらしなど海の動物は、カラハリ砂漠とちがつて非常に豊富だし、それに比べて植物性食物は秋に実る草の実や食用の草が少い。少あるだけなので、当然、ここでは狩猟が食生活の主体となり、採集は副次的な位置を占めている。したがって、それだけ女の負担は軽くなるわけだが、その代り男との共同の仕事がかなりある。

秋になつて作る長屋は、ブッシュマンの小屋と違って、石や芝土を材料にした頑丈な建物だが、この長屋作りや春のテント作り、それから、海の小魚類の漁獲が、おもな共同作業である。これらの小魚は干物にされ、冬の食料になるのだが、この干物作りも共同で行なわれている。

だが、同時に、自然環境がもたらす微妙なこれらの差が、量的なものから質的なものへと拡大され、深められてく過程も見逃してはなるまい。それは、つきに取り上げる、なかば農耕民族で、なかば採集狩猟民族であるナンピクワラの生活のなかで、一層の発達をみせている。

c ナンピクワラ

ナンピクワラは、ブラジルの奥地、アンゾン河上流の高地地帯に住むインディアンの一部族である。彼らの住む地方は、南米大陸でもっとも不毛な地域の一つといわれ、「一年の半分は雨が降らない」なにかば砂漠の荒野で、生えている植物といえは、「とげのある、かたわのような灌木」ぐらいである。

しかし、「最も単純な表現にまで還元された社会」をさがし求めていたレヴィーストローは、この荒野に住むナンピクワラの社会こそ、彼の目ざすところのものであると感じ、「私はそこに、もう人間だけしか見いださなかつた」と、彼の名著『悲しき熱帯』（一九五五年、川田順造訳 中央公論社版 一九六七年）の第七部の末尾を結んだのである。

そこで、同書によりつつ、ナンピクワラの社会にみられる労働観念をさぐつてみよう。

ナンピクワラの場合も、社会生活の単位は核家族である。『夫婦』は、なによりもまず、経済生活の単位であり、感情の結びつきの単位である。この遊動する、たえず形成と分解をくりかえしている群れのなかにあつて、夫婦は、「すくなくとも原則

的には「安定した実体をなしているようにみえる。そしてまた、群れを構成する人々の生存を保証しているのも、『夫婦』だけなのである。」

と、レヴィ・ストロースは書いています。

彼らはいずれも一夫一婦の単婚だが、ただ群れの首長だけは一夫多妻の特権をもっている。この首長の存在は、ブッシュマンにもアンマサリクにもみられない。田中によれば、ブッシュマンには萌芽的なものとして「情況的リーダーの存在」はあるが、それが首長として固定化したり、まして自分だけ数人の妻を擁したり、ということはない。アンマサリクの場合も同様である。「制度化されたリーダーシップはないが、公けに認められたリーダーはいる」と、ミルスキーは書いています。腕のいい狩人とか有力なシャーマン、有能なドラム・シンガーなどがそれだが、彼らのリーダーシップは一時的なもので、田中のいう「情況的リーダー」にあたるといえよう。

ブッシュマンにもアンマサリクにもみられない首長が登場する理由をさぐるためには、まず、ナンビクワラの社会生活の実態を知る必要がある。

ナンビクワラがなれば農耕民族であり、なれば採集狩猟民族であることはすでに述べたが、彼らが農耕に従事するのは、十月から三月までの雨の多い季節である。「小川の流れを見おろす小さな高地の上に」、「木の枝やヤシの葉で」こしらえられた粗末な小屋から成る村が作られる。この村については、レヴィ・ストロースは詳しく報告してくれないのでよく分らないが、その規模は、ブッシュマンのキャンプやアンマサリクのセトルメントよりも大きいように推測される。ほぼ半年間、定住する点ではセトルメントと同じだが、

基本的に異なるのは、その経済的基盤である。セトルメントの場合には、狩猟の困難な冬期に、いわばなんとか食いつないでいくために大勢が一カ所に定住するのだが、ナンビクワラの村は、彼らが谷底の湿地にある廊下状の森林を焼畑につくった菜園を基盤にして成り立っている。

菜園の仕事は主として男の分担であり、マンジョーカ（熱帯の降雨林地帯に栽培される根茎植物。焼いたり、かゆにしたりして食べる。また、おろしてから干し、粉にして貯蔵する）、各種のトウモロコシ、タバコ、ときにはインゲン豆、綿、落花生、ヒョウタンなどが栽培される。菜園での収穫は、彼らに十分な食料を保証する。つまり、ナンビクワラにとって、村の定住生活は、安定した生活なのである。

それに反して、四月にはじまる乾季の遊動生活は、彼らにとって不安定な、苦難の生活となっている。すくなくとも、『悲しき熱帯』ではそのように描かれている。

ナンビクワラが乾季の初めに村を放棄し、いくつかの小さな群れに分かれて、荒れはてたブラジルの高地を遊動していくのは、いうまでもなく、乾季には菜園を維持していくことができず、食料源を他に求めなくてはならないからであろう。憶測をたくましくすれば、彼らが農耕技術を開発するまでは、おそらく雨季にも遊動生活をつづけていたとおもわれる。この二重生活が、いつ、どのようにしてはじまったかは知る由もないが、採集狩猟段階から農耕段階へ過渡期として、ナンビクワラの社会生活は興味ぶかい。

乾季の遊動生活の状態は、ブッシュマンの場合とほとんどおなじである。群れは数家族からなり、「一日あるいは数日、ときには数

週間」、彼らは一カ所にとどまる。それは、ブッシュマンのキャンプに相当する。キャンプ地に作られる小屋も、「家族ごと、雨露をしのぐだけの簡単な」ものである。労働の分担も同じで、採集は女の仕事とされ、女たちは「ウジ虫、クモ、イナゴ、齧歯動物、蛇、トカゲ」のような小動物や、「木の実や草の実、根、野生のハチの蜜」などを、掘棒をもちいたりして集める。男は弓矢をもって狩りに出るが、獲物にぶつかる確率は、ブッシュマンの場合とおなじく、きわめて低い。したがって、この期間の食生活のベースは、女たちの採集する食物である。

彼らが、仕事を楽しみながらしている様子を、レヴィ・ストロースは、次のように書いています。

「暑いさかりの時間、宿営地には物音がなくなる。住民は、黙りこみ、ある者はまどろみながら、日よけの下にできるつかのまの陰を楽しんでいる。それ以外のときには、仕事は話のやりとりのただなかで行なわれる。原住民は、ほとんどいつも陽気でよく笑い、冗談をとばし、ときどきわいせつな話や糞尿譚をしては大笑いを爆発させる。作業は、人がたずねてきたり、その他さまざまの出来事でひんばんに中断される。犬とか、なついている鳥が交尾でもすると、みんな仕事の手を休め、その横顔を夢中になって子細に見守る。それから、この重大事件についての評釈をひとしきりとりかわしたあとで、ふたたび仕事にかかる。」

これらの記述から推察するかぎり、すくなくとも乾季の採集狩猟生活におけるナンビクワラの労働観念は、ほぼブッシュマンと同じだといつてよさそうである。ブッシュマンの特徴であった離合集散についても、「群れは、形成されては解体し、増大したかと思うと

消滅する。数カ月のあいだに、群れの構成も、それを構成する人々も、群れがどのような形になっていたかも、わからなくなることがよくある」という具合で、一夫多妻の首長が存在するという点を除いては、ほとんど変わらない。

ただ、このように基本的に共通したルールで営まれているかにみえる社会生活について、レヴィ・ストロースは、その著書の題名からうかがえるように、かなりペシミステックであり、その点が田中のブッシュマンの生活に対する評価と大分異なっている。たとえば、レヴィ・ストロースがナンビクワラのキャンプで綴った美しいフィールド・ノートの一節をみてみよう。

「初めて荒野で、インディアンとともに野営する外来者は、これほど完全にすべてを奪われた人間の光景を前にして、苦惱とあわれみにとらえられるのを感じる。この人間たちは、なにか恐ろしい大変動によって、敵意をもった大地の上におしつぶされたようである。……」

しかし、このみじめさにも、ささやきや笑いが生氣を与えている。夫婦は、過ぎ去った結合の思い出にひたるかのように抱きしめあう。愛撫は、外来者が通りかかっても中断されはしない。彼らすべてのうちに、無限の優しき、深い無頓着、素材で愛らしい、動物のそのような満足を、人は感じとるのである。そして、これらさまざまな感情を集めた人間の優しさの、最も感動的で、最も真実な表現であるなにかを、人は感じとるのである。」

この感想は非常に美しく、感動的でさえあるが、それだけに警戒する必要がある。なぜなら、それはあまりに西欧的価値観の枠組につきすぎている、ナンビクワラ独特の価値観を洞察する努力に不

足があるようにおもえるからである。その点でいえば、田中の『ブッシュマン』の方が、ずっとブッシュマンの心のなかにはいり込むことに成功している。そのことが、おなじ採集狩猟民の社会生活を扱いつながり、その評価の点でかなりのひらきを生んだ理由である。したがって、採集狩猟民の社会生活の観察については、『悲しき熱帯』よりは『ブッシュマン』の方が、ずっと客観的であり、真実に近いといつてよいだろう。

ナンビクワラにみられる首長の問題も、あるいはこの視点の相違が多少からんでいるかもしれない。レヴィ・ストロース自身語っているように、首長といつてもその「権威は非常に弱いもの」であり、もちろん世襲ではなく、群れの人気がわるく、大半のメンバーがもつと評判のいい群れに移ってしまうような時には、もはやその群れの首長であることをやめて、他の群れに加わる、といった按配である。もつとも、そうなる、彼の副妻たちはどうなるのか、疑問が残るが、それについてはレヴィ・ストロースはなにも語っていない。というのは、まえにも述べたように、一夫多妻は首長だけの特権で、平メンバーは原則として一夫一婦だからである。

もつとも、この場合の一夫多妻は、「このことばの本来の意味における複婚ではなく、それは、単婚に、性質の異なる関係がつけ加わったもの」である。というのは、普通の単婚の妻とおなじ役割を演じるのは第一の妻で、その他の妻たち（副妻）は、第一の妻よりも若い世代に属し、性別の分業にしたがわず、女の仕事だけでなく、男の仕事もおこなう。つまり、彼女は、首長が群れから委託された仕事（遊動生活の場合には、群れの移動の道順の踏査やキャンプ地の決定、狩りの際の偵察等々、定住生活の場合には、定住の時

期や場所の決定、作物の選択、耕作の指図等々）を一人ではとてもこなしきれないので選ばれた助手でもある。助手なら男の子でもよいわけだが、女が選ばれるのは、実務上の手助けだけでなく、心理的、精神的な慰安と激励を与えるためであろうか。

ブッシュマンやアンマサリクの「情况的リーダー」には、このような特権はみられない。してみれば、ナンビクワラの首長は、やはり、「情况的リーダー」よりももう一歩進んだリーダーとみなすべきだろう。

レヴィ・ストロースが、遊動生活中の首長の仕事としてあげているかすかすは、仕事としてはブッシュマンにも同じようにあるはずである。ブッシュマンの場合には、おそらく各人が交替かなにかで負担しているこれらの仕事を、なぜナンビクワラは首長一人に数人の女をつけて委託してしまったのか。その結果、首長一人が副妻ともかけずり回り、平メンバーはまったく受動的に、まかせきりになってしまったのか。

この疑問を解く鍵は、ブッシュマンやアンマサリクにはみられない、あらたな生活型態——つまり、農耕による定住生活のうちにあり、とみるのがごく自然であろう。ざんねんなことに、『悲しき熱帯』では、この定住生活についてはほとんど語られていないので、これ以上、この仮説を裏づける材料はない。だが、農耕生活が定着するにつれて、集団の離合集散性は弱くなり、逆に親族組織は強まり、また首長の権威と権力が固定的になり、やがて世襲制となる——この経過をみる時、この仮説はあたらすといえども遠からず、ということにならないだろうか。

d トロブリアンド島人

ここで最後に、ニューギニアのトロブリアンド島人に登場してもらおう。この未開民族の農耕生活については、B・マリノフスキーの古典的な名著といわれる『西太平洋の遠洋航海者』（一九二三年、寺田・増田訳 中央公論社版 一九六七年）があるので、それによってみていくことにしよう。

ニューギニア本島の東端から北上し、ドブー島人の住むドブー島・アンフレット島人の住むアンフレット諸島を通り過ぎると、トロブリアンドの珊瑚礁多道海に出る。この海に浮ぶ大小十いくつかの島からなるトロブリアンド諸島は、マリノフスキーによれば、「パプア・メラネシアのほかの地域とは異なる、たくさんのきわだった風俗、習慣をもつ民族誌学的地区」である。

マリノフスキーが伝えるトロブリアンド島人の解放的な性生活は、ヴィルヘルム・ライヒの注目するところとなり、性的抑圧は生物学的性質のものではなく、社会学的な性質のものである、とする彼の学説の成立をうながし、そのようなところから、トロブリアンド島人の社会生活を「地上の楽園」視する傾向も一部にある。しかし、『西太平洋の遠洋航海者』が描くかぎりでは、彼らの社会生活は、ブッシュマンやアンマサリクほどに平等ではないし、自由でもないようにおもわれる。

トロブリアンド島人の社会生活の単位は、気まぐれに離合集散を繰り返す核家族のグループではなく、一定の地点に定住する部族の村落共同体であり、トテム氏族の組織である。たとえば、トロブリアンド諸島でいちばん大きな島であるポヨワ島の島民は、四つの氏族のうちのいずれかに属し、一つの家族のなかにも、すくなくと

も二つの氏族が存在する。というのは、夫は妻や子とべつの氏族でなければならぬからである。

また、親族組織についていえば、彼らは母系であり、「真の親族関係、真の身内は、男とその母方の親族のあいだにだけ存在すると考えられている。」彼らのなかでは、「生理学的な父親という概念は知られておらず」、「父は子どもたちにとりわけ近い、最も愛情ゆたかな友達」とされている。子どもたちの真の保護者は父ではなく、母方の兄弟、つまり母の伯父ということになっているが、実際には、子どもたちを危難から守ろうとして骨身を削るのは、母方の伯父より実父の場合が多い、とマリノフスキーは述べている。

さらに、トロブリアンド島人の社会で目立つのは、首長を頂点とする世襲の身分制と、やはり世襲の呪術師、妖術師の存在である。「首長のいるところでは、平民は彼より高い場所に位置しようとはしない。つまり、体を曲げるかしゃがみこむのである。同様に首長がすわれば、だれもあえて立とうとしない」といった按配だ。

このように権威を発揮する首長制度は、ドブー島人の社会にも、アンフレット島人の社会にも、いやメラネシア人全体の部族社会にもみられないという。これらの社会には首長はおらず、それぞれの部落の長老が権威ある存在とされている。

長老がキャンプや部落における権威者とされることは、すでにブッシュマンの場合にもみられる。価値体系が不変であり、すべてが慣習や経験にもとづいて行なわれている社会では、年輪をへた経験者の意見の方が、若年者の意見よりも、大体的場合、的確だし、間違いないのが自然である。長老が尊重されるのは、したがって当然といえよう。

酋長は、すでに、ナンビクワラの場合にも登場しているが、それはおそらく、ドブリアン島の社会でみられる、それぞれの村に一人いるという頭に相当するものではないだろうか。

トロブリアン島人の酋長は、このような「部落の筆頭者あるいは権威者」であると同時に、「氏族組織すなわち共同体を、それぞれ一定の高低の序列をもった階級またはカーストに分ける、トーチムの氏族の長」という二重の性格をもっている。これが、他のメラネシア人社会にみられない特徴である。

しかし、トロブリアン島人の酋長が絶大な権威をもちうるのは、この二重の性格のためだけではない。彼は、この島の最大の金持なのである。

酋長は、どのようにして富を集めるかというと、その場合、主要な役割を果たすのが、彼の特権である一夫多妻婚である。ナンビクワラの酋長は、自分の任務遂行のための助手として数人の副妻をもったが、トロブリアン島人の酋長は、酋長の権威のしるしである富を、二桁にのぼる副妻の姻族の労働をつうじて手に入れるのだ。

トロブリアン島人の酋長は、自分に隷属にする村の頭の妹かその親類を妻を迎えることになっており、妻の家族は、「トロブリアン島の法」によって、彼に収穫のかなりの部分を収めなければならず、妻の家族はそれぞれの村の頭かその縁者だから、結局、村ぐるみ、酋長に収穫のかなりの部分を収める勘定になる。

「むかしは、オマラカナの酋長は四十人もの妻妾をもち、キリウイナの耕地の全収量のおそらく三割から四割を受けとったと思われる。妻の数がたった十七人になってしまった現在でも、巨大な倉庫をもち、収穫のたびごとに、これが屋根までヤム芋でいっぱい

いになる。」

とマリノフスキーは書いている。すさまじい収奪というほかない。酋長のそばにかならず妖術師がいるのは、この収奪による不自然で不当な蓄積を、反抗者から防衛するためであろう。なぜなら、妖術師は、さしずめトロブリアン島の死刑執行人だからである。トロブリアン島人は、妖術を心底からこわがっている。妖術は十分にその力をふるうことができるのである。

トロブリアン島人の村にはいくと、中央に、バクと呼ばれる大きな円形の広場があり、その周りをヤム芋の小屋がぐるりと取りかこんでいる。小屋は杭の上に建てられ、小屋の正面は装飾がほどこされ、側面は大きな丸太をたがいちがいに積み重ねて、丸太のあいだの広いすきまから、貯えられているヤム芋が見えるようになっている。

このヤム芋小屋のなかで、幾軒かはとりわけ立派で、大きく、高く、正面の装飾はもはやでほしい。それが酋長やその他の身分の高い人のヤム芋小屋なのである。

マリノフスキーによれば、トロブリアン島人にとって、ものが豊富だということは、それ自体価値あることであり、蓄積はそれ自体、愛すべき事柄だという。

「彼らは蓄積それ自体を愛するがゆえに、所有したところでもとも使いきれないくらい大量に生産する。食料は腐るにまかせる。

必需品は望むだけのものを持っているのに、これを富という性格において利用するために、原住民はいつでももっとほしがる。」
ここには、貯えるということを知らず、余分な獲物が手にはいった時には、それを食べつくすまで働かないブッシュマンやアンマサ

リックとまったく異質な社会が開かれている。ショシャルのいう生理の自動性は、ここではもはや失われている。彼らは、必要に迫られて作るのではなく、蓄積するために作るのである。そして、「食物の蓄積は、経済的将来をおもんばかって行なわれるばかりでなく、富の所有によって社会的特権を高めたり、みせびらかしたいという欲望にうながされている」のである。

もしこのマリノフスキーの観察が妥当であるならば、農耕を基盤とした社会は、採集狩猟を基盤とした社会と、まったくその価値体系を異にしている、ということができよう。トロブリアン島人の酋長制度は、このような農耕社会にして、はじめて成り立ち得たシステムなのである。

それでは、この農耕社会における労働観念はどのようなものであろうか、それをつぎにみていこう。

ヤム芋小屋が富と権力の象徴とされていることからわかるように、トロブリアン島人の経済的基礎は、ヤム芋の栽培である。

村からすこしはなれたところに、叢林を切り開いた畑がある。毎年、島全体の四分の一か五分の一の地域が畑として耕されるのだが、そこにはヤム芋のほかタロ芋、サトウキビなどがうえられる。そして、彼らの「働く生活のなかには、この畑で過ごされ、おそらく彼らの興味、野心のなかにはこれがこれにつきこまれる」のである。

叢林を切り開いて畑を作り、畑の周りに柵根をゆい、ヤム芋を植え、ヤム芋を支える大きな柱を立てる、——これらの労働はすべて男が共同で行なう。畑仕事のうち、女の分担は、除草作業ぐらいである。この場合の共同労働は、姻族の義務となっており、それは必要に迫られてというより、「慣習と伝統への服従」によるものだと、

マリノフスキーは述べている。

総じてマリノフスキーは、「慣習と伝統への服従」という解釈を、その他の場合にも強調するのだが、これにはポーランド貴族出身という階級性が、いくぶん反映されているように感じられる。「慣習と伝統への服従」というだけでは、なにも説明されたことにならないのであって、なぜそのような慣習と伝統が形成されたかが問われはじめて、正しい解釈が得られるはずである。過度の進化的主義への反発が生んだマリノフスキーの限界というべきであろうか。

マリノフスキーが観察した時点での共同労働は、たしかに「慣習と伝統」によってなされたものであるかもしれない。けれども、だからといって、「彼らは、いつもそうしてきたし、自分の回りの人も同じようにするし、いつまでも同様であるにちがいない」とは決していえない。酋長制度はもとより、親族制度にせよ、トーチム氏族にせよ、最初の最初から、彼らの社会にあったわけではない。それはおそらく万単位の年月をかけて、徐々に形成されたものである。その過程を伝える資料が皆無だからといって、その長い年月の変遷の重味を捨象してしまい、現にある状態を恒久不変であるかのように提示することはあきらかに誤りである。

トロブリアン島人にみられる共同労働も、その始めはおそらく、ブッシュマンとおなじく必要からなされたものであったろうし、その必要は、労働を容易に、楽にする必要であると同時に、社会的欲求を充たす必要であったといつてよいだろう。

この社会的欲求が、人間の基本的な衝動であることについては、マリノフスキーも認めている。彼は、贈与は「人間の基本的衝動」である、と言いつつ、「それらは、贈物の交換を通して、社会的なきす

なをつくりたいという、根強い傾向である」と述べている。

もっとも、その少しまえのところで、マリノフスキーは、「贈与の基本的な動機は、所有と権力を誇示したいという虚栄心であって、共産主義的傾向あるいは制度があると仮定することなど、もとでできないのである」と記しており、かなり論旨に混乱がみられるが、それは、彼の方法論が現象と本質とを方法的に区別していないためであろう。

トロブリアンド島人の労働観念が、その最深層においては、ブッシュマンやアンサリクのそれとおなじ質であることは、まず間違いない。しかし、彼らが農耕生活を営むようになり、おそらく最初は不時の用意にそなえるという経済的要求ではじまった蓄積が、それのもつ大きな効用のゆえに重視され、価値づけられるにいたり、必要とか楽しむ、という観念のほかに、貯えるという観念が大きな比重をもつようになったのだろう。

蓄積は富の第一条件であり（蓄積なしに富は成り立たない）、自然の不平等は、自然のままに生きる彼らに、富の不平等をもたらしただにちがいない。貯えることが価値あることとされる通念が有力な社会では、多く貯えている者の価値があるのは当然である。こうして富は権威に、そして権力に結びつき、身分社会ができあがる。ヤム芋を基礎としてできあがったこの身分社会は、自然条件の変化か、外国人の到来というような外からの衝撃がないかぎり、安定し、変化することが少ない。それは、ある意味で自然社会のヴァリエーションだからである。

この社会を維持していくために、無数の試行錯誤を重ねながら、おそらく万単位の年月をかけて形成された慣習や伝統を、唯一の価

値基準とし、その指示するままに生活し、労働するように彼らがなつたとしても、不思議はない。それが、彼らの労働観念に反映するのは当然である。

マリノフスキーが指摘しているように、トロブリアンド島人の社会には、文明社会に顕著な利得の観念はみられない。だから、白人が彼らを働かせようとして、「利得という刺激を利用しよう」としても、うまくいかない。彼らを労働に駆りたてる刺激は、個人的なよい報酬とか儲けではなく、自然の必要や労働する楽しみに加えて、立派なヤム芋をできるだけ沢山収穫し、ヤム芋小屋を一杯にみたしたいという蓄積への欲望や、収穫の際、時折おこなわれるコンクトルに参加して、社会的榮譽を得たいという社会的名声への欲望、あるいは首長や姻族に収穫の大半を貢納し、供与するという社会的義務を果たさなくてはならぬという責務観、また、畑の外観や体裁をできるだけ美しく飾るといふ審美的要求、等々である。

社会的名声への欲望や、社会的責務観は、すでに採集狩猟民の労働観念のうちにもみられる。ただ、彼らの流動的な、不定形な社会に比べて、農耕社会は、定形の、固定的な社会であり、その質の違いに応じて、社会的な名声や社会的責務が、社会的身分に結びつきやすい点は、区別しておく必要がある。この点を見失う時、一方的な否定もしくは讚美が生まれやすいからである。

審美的要求も、この段階ではじめてでてきたものではない（はじめてでてきたのは、貯えの観念ぐらいであろう）。それは、労働を楽しくする観念の延長線上にあるといつてよく、文明社会にはいつ

ても、利得と効率の観念が最優位を占めるとともに、後退に後退を重ねていく。これまで、この点についてふれることが少なかつたから、すこしトロブリアンド島人の実情を紹介しておこう。

彼らは、畑を作る際に、丹念にあらゆる小石を取りのぞき、きれいに手入れをおこなう。それは、植物の成育に必要な程度を越えた入念さで行なわれる。そのために、多くの時間と労働をかけることを、彼らは少しもいとわない。ということは、彼らの労働が、たんに食物を得る必要のためにだけなされているのではなく、労働それ自体を楽しんでいるからであろう。

そのことは、畑のまわりにめぐらされた頑丈な垣根や、ヤム芋用の強く大きな棒を作る場合に、さらに明らかとなる。それは、ヤム芋の成育にはそれほど必要でなく、むしろ、彼らの畑を美しく飾る装飾品というべきである。

彼らが、このような装飾で畑を飾る理由に、おそらく呪術的な動機がある、とかんがえられる。呪術師は、畑作りや耕作、そして収穫には欠くことができぬ存在であり、トロブリアンド島人の畑仕事は、すべて呪術師の指図の下におこなわれている。

あるいは、畑を美しく飾ること自体、たんに審美的な、装飾的な目的ではなく、そうすることによって、栽培された植物の霊がそれを喜び、すくすくと成育すると、彼らは信じこんでいるのかもしれない。かりにそうであるとすれば、なおさらのこと、彼らの労働には、必要と楽しさ（審美的要求）とが、一つに統合されている、といわなくてはならないだろう。「トロブリアンド島人は、多分に仕事自体のために働き、畑の外観や体裁が美的にみえるようにとすいぶんくふうする」というマリノフスキーの言葉の意味を、そのように解する時、この点での彼らの労働と文明社会の労働との質の相違はあきらかになるはずである。

これまでに述べてきたことが示しているように、一口に未開社会といつても、採集狩猟社会と農耕社会とは、その労働観念はかなり質的に相違している。そこには共通する部分もあるが、それ以上に異質の部分があり、この異質の部分、次の文明社会との共通部分となり、同時に文明社会独特の部分を作りだされていく、そのたびごとに、人間は、生理の自動性のような動物性を失い、人間個体の自家調節作用をなくしていく、そのかぎりでは、人間の歴史は退化の歴史であるとしても、かならずしも奇言ではなからう。

古代ギリシャやイスラエルの詩人、予言者たちが、口を揃えて過去を讚え、現在を墮落の時代とみる一種の退化史観、終末史観の上に立っていたのも、ゆえなしとしない。

けれども、文明社会の人間は、そのような代償を払うことによつて、たしかに個体としての平均寿命を延ばしていったし、人口も膨張の一途をたどっていった。たとえば、ブッシュマンの平均寿命は四〇歳という短命であり、人口も漸減しこそすれ、増加していつていない事実、生物体としては文明社会の人間の方が、未開社会、とりわけ採集狩猟社会の人間よりも、大局的には自然によりよく適応していることを物語るものである。

人間の歴史のこの二律背反的状况の極限が、ついに現代の時点でに爆発したのかもしれないが、それは、この探究の直接の課題から外れた問題である。それゆえ、このきわめてむずかしい問題状況には、これ以上言及することを避けるが、たまた、次に文明社会の労働を論ずる場合にも、この二律背反的状况がさらに露骨に背景に姿をあらわしてくることだけは、心にとめておいてほしいとおもふ。